



輝いています

ひと

ガラス作家

はやし あや か
林 彩加 さん

ガラスのぬくもりを伝えたい

「好

生きて気持ちがいい作品を

生むんです」。そう語るのは「コロロ硝子」の名前で活動するガラス作家の林彩加さん（35歳・南町4丁目）。歴史民俗資料館で12月24日まで開催されているオータムギャラリーに出品しています。小学生の頃、家族旅行で行く先々のガラス美術館に立ち寄り、ガラス細工を集めていた林さん。楽しい思い出が詰まったそれらは、とても輝いて見え、一つ一つが宝物でした。いつか自分もガラス作家になりたい。そう思っていた林さんですが、いざ大学進学を前にすると、就職に有利なデザインの道に進むか、憧れのガラス作家を目指すか悩み

「たくさんの人に作品を見てもらいたいです」と林さん

ます。しかし、「ほんとうにやりたいことをやってみなさい」という母の言葉に勇気をもらい、ガラス作家への道を歩み始めました。大学で一通りの技法を学んだ後も、陶芸や日本画からもヒントを得て、ようやく独自の表現にたどり着いた林さん。どこか懐かしく、あたたかいガラスの魅力を届けたいと、SNSに毎日作品を投稿しました。すると、ガラスの中に物語を閉じ込めたような作風が徐々に話題を呼び、ネット記事で紹介されると、一躍脚光を浴びました。今回の展覧会では、「お菓子のまち」という新たなシリーズにも挑戦しました。子どもにも、より直感的にかわいい、きれいと感ぜられるように作り上げられたこの作品たち。そこには「あなたらしさはあるんだよ」という、子どもたちの挑戦を後押しするメッセージが込められています。「自分にしか生み出せないと思える作品が完成した時に生きている実感が湧きます」と話す林さん。そのきらめく笑顔は、思いが込められた作品たちとともに、輝き続けることでしょう。

今月の河鍋暁斎記念美術館

天才絵師の作品 蔵にあり

—No.90—



暁斎筆「大江山退治之図」軸装

切断された鬼の首が、平安時代の武将・源頼光に向かって勢いよく飛びかかっています。鬼は現在の京都府丹後半島にある大江山に住む酒呑童子が本性を現した姿です。京都の都で姫君や財宝を奪う童子を退治するよう帝の命を受けた頼光と家臣の四天王（渡辺綱、坂田公時、卜部季武、碓井貞光）らは、童子に「神便鬼毒酒」を飲ませて神通力を削ぎ、首をはねて退治します。暁斎はこの鬼退治のクライマックスシーンを、迫力ある筆致で描いています。



現在の茨城県古河市に生まれる。浮世絵や狩野派を学び、江戸・東京の庶民から人気を博す。明治9年、万国博覧会に肉筆画を出品。14年、内国勲業博覧会で日本画の最高賞受賞。娘の暁翠も日本画家。



かわなべ きょうさい
河鍋 暁斎
天保2年（1831）
～明治22年（1889）

河鍋暁斎記念美術館 開催中

企画展「画鬼暁斎 妖怪絵尽くし」展
同時開催 特別展「暁斎プラスワンシリーズ39
野坂隼和 横乗戯画」展

開館 = 午前10時～午後4時
休館 = 火・木曜日（祝日除く）、毎月26日～末日
ところ = 南町4-36-4
入館料 = 一般600円 高校生・大学生500円
小・中学生300円 65歳以上500円
※65歳以上は年齢の分かる物、学生は学生証をご提示ください
詳細 = 同館 ☎441・9780



詳しい内容は美術館のホームページをご覧ください

